

武家の都会像の形成

——都市イメージとしての江戸図屏風——

塚 本 学

- 一 ここでの問題と私の立場
 - 二 都会とみやこ——前近代の都市像
 - 三 将軍家のみやこ像
 - 四 武家の都会像
- むすびにかえて

論文要旨

ここでは、江戸図屏風を通じて日本での都市像について考えていきたい。この場合江戸図屏風の成立年代はさしあたり保留しておいてよく、十七世紀の江戸を描くにあたって構想された江戸像がどのようなものであったかを、都市像との関連でさぐってみるようになる。前近代日本で、京都は「みやこ」すなわち「帝都」としての人口密集空間であったが、古くからあった都市的空間の魅力が十五・六世紀にはとくに発展し、それが景観の大きな要素とまでなった。洛中洛外図屏風はその表現であった。十七世紀に新しく登場した都市江戸は京都を先行都市と意識し、江戸図屏風は、洛中洛外図屏風を先行作品とした。だが、江戸図屏風の都市像は、洛中洛外図屏風の都市生活の魅力を表現したものとみえない。江戸が、将軍家政府の居所として建設され諸大名の陣営集中地であったことによるわけで、この点では江戸図屏風は、肥前名護屋城図との共

通性をもつ。武士たちの遊楽の場面が、都市以外の場面での狩猟等を主としていることも、都市的生活の魅力を描いた作品という性格を弱めているわけで、都市文化の魅力描写の弱さは、出光本の江戸名所図屏風とくらべてたしかである。この作品が将軍家光の行動を中心としているところから説明できるが、江戸の武士にとって江戸の魅力が、このような非都市的遊楽であったのは、江戸が将軍家の「みやこ」であったことに対応するわけである。だが、都市的生活の魅力を大きく生み出したのが京都であったのに対して、これをひろく普及させたのは江戸であった。武家の嗜好の変化が、都市的な江戸の魅力を見いだしていくとき、江戸像はこの作品の描写と異なるとともに、京都の魅力ともちがったものになっていく。京都とは異なる都市像が、ここを出発点として生み出される。